

ヤンゴン素描 53

龍王ブーリダッタ本生（その3）

山形洋一

第十三場、空中：ガルーダが龍をさらい、隠者の木を引っこ抜く

前の場から話は少し遡ります。

若くてまだ龍狩りの要領を知らないガルーダが、ようやく捕まえた龍をぶら下げて空を飛んで帰りますが、龍は助かりたい一心に、大きなバニヤンの木に爪をかけます。猛々しいガルーダそれとも知らずに大きく羽ばたき、バニヤンは根こそぎ引き抜かれます。高い山の上の巣に戻ってゆっくり龍を平らげたガルーダは、ふと龍の爪の先にバニヤン樹が引っかかっているに気づき、仰天します。

「これは、行者はんが修行したはるところの樹やないかい。行者はんを怒らして呪いでもかけられたら、えらいこっちゃ」

と、さっそく謝りに出かけます。

第十四場、地上、隠者の庵：龍調伏の呪文がガルーダから行者を経て、蛇使いに伝わる

バニヤン樹が引き抜かれてぽっかり空いた森の空き地に、行者は一人で地均しをしていました。

「帰命頂礼、ナモー、南無」

「何の用かいな」

「隠者様、知らんこととは言え、陰にしておられたバニヤンの樹を引き抜いてしもうて、ほんまに済まんこったす。わてにどんな罪がおますやろか？」

「知らんとしたこっちゃさかい、罪はないなあ」

「ほたら、龍の罪でっしゃろか？」

「龍かて、命がけやったしなあ」

「そやかて、このままでは相済みまへん。お詫びに、わてらガルーダしか知らん龍調伏の呪文をご伝授差し上げますよって、それで堪忍しとくなはれ」

「そんな呪文なんぞいらん、いらん。修行の邪魔や」

「そないにおっしゃられては、わての気持ちが済みまへん」

「ひつこい鳥やなあ」

隠者は心ならずも龍調伏の呪文を教わります。

（ちなみに、関西弁では「しつこい」が「ひつこい」となります。近頃では流石に見ませんが、私の子供の頃は「ヒチャ」という質屋の看板を多く見たものです）

やがてその森に、借金まみれのしょぼくれブラーマンが死に場所を求めてさまよい、隠者の身の回りの世話をし始めました。隠者に気に入られた彼は、別れ際に龍調伏の呪文を教わります。隠者としては余計な荷物を手放すぐらいのつもりだったのでしょうか。

第十五場、ヤムナー河畔、蛇使いブラーマン、龍調伏の呪文で如意珠を得る

庵を離れたしょぼくれブラーマンは、呪文を忘れないよう小声で唱え続けながら、ヤムナーの河畔までやってきました。たまたま竜宮から散歩にきた龍女らが、輪になって歌い踊っていました。その輪の真ん中の砂山に光源として置かれていたのは、例の如意珠です。龍調伏の呪文を耳にした彼女らは、ガルータに襲われると思い、慌てて地下に潜ります。砂山に残された如意珠はやすやすと、借金漬けブラーマンの物になりました。

第十六場、ヤムナー河畔、獵師ブラーマン、如意珠と引き換えにブーリダッタの居場所を教える。

やがてそこに、前回、妻に追い出された獵師ブラーマンが、息子を連れて差し掛かります。「息子、見てみい。あれ、龍王が前にくれた珠とちゃうか？ 龍の居場所を教えたったら、あれをくれるやろな」

「お父ちゃん、そんなエゲツないことしなはんな。龍王さんにあんな親切にされといて」

獵師ブラーマンは息子の諫めを聞かず、ブーリダッタの居場所を教えてしまいます。愛想を付かせた息子は、その場で出家して山に向かい、獵師は如意珠を得ますが、家に持ち帰る前にうっかり地面に置いたため、また無くしてしまいます。

どうもこのあたり、獵師の息子が話をややこしくしているようですが、ジャータカ物語では必ず最後に後日談があり、この話ではブーリダッタが後の世の釈迦牟尼、しょぼくれブラーマンが仏敵デーヴァダッタ。獵師の息子は、釈迦牟尼の従者として最後までお仕えしたアーナンダ（阿難尊者）だったと、配役紹介がされます。従順可憐な阿難尊者は在家信者たちにとって馴染みやすく、多くのファンのためにこの出番を作ったような感がなくもありません。かつて日本の東北地方の田舎芝居では、どんな演目にも必ず義経が出てきて、「さしたる用もおわさねば」とまた退場したそうですが、ちょっとそれを思い出しました。

さて話はいよいよブーリダッタの受難。ドキドキハラハラの残酷シーンに差し掛かります。ミャンマーのお寺の絵解きでも、この場面が一番生き生きしています。

第十七場、ヤムナー河畔、蛇使いブーリダッタを捕まえ、痛めつける。

獵師ブラーマンから蟻塚の場所を聞いたしょぼくれブラーマンは、布薩の行に耽けるブーリダッタを見つけます。ブーリダッタはブラーマン意図を読んでいましたが、怒りの感情を起こしてせつかくの布薩を無にすることを恐れ、とぐろの中に頭を突っ込んで見ぬふりをしていました。

今や蛇使いとなったブラーマンは、呪文を唱えながらブーリダッタの尻尾を掴んで地面に頭を叩きつけ、背中を踏みつけて背骨をバラバラに外し、頭を掴むと口を開かせて、龍の毒

封じの薬を垂らしこみ、草の蔓で編んだ籠にブーリダッタを閉じ込めます。この間ブーリダッタは全く反撃せず、されるがままでした。怒って当然の状況で怒りを鎮めてこそ、のちに天上に生まれ変わるための功德（クレジット）になると知っていたからです。

第十八場、とある村、蛇使い、ブーリダッタの芸で千金を手に入れる

蛇使いブラーマンは近くの村に行き、早速龍の芸を披露します。ブーリダッタは観客を喜ばせるために、その言いなりです。

「はい、大きくなれえ。はい、小さくなれえ。はい、赤くなれえ、青くなれえ。頭が三つ、五つ、7つ、どんどん増やせえ」

ブーリダッタは言われるままに姿を変えて見せました。村人は大喜び。あっと言う間に金貨十万枚分の富が集まりました。実はこの芸を始める前、蛇使いブラーマンは

「まあ金貨千枚ほど集まったら、この龍を放したろかいな」

と腹で思っていたのですが、あまり簡単に集まってしまったので、かえって欲が出る。よくあることですね。このまま龍を解放する気にはならず、一つ都で大儲けをしようと、道中稼ぎながらヴァーラーナシーにやってきます。

その都の王様こそ、ブーリダッタの伯父さんで、物語はいよいよ大団円に向かうのですが、仔細は次回にまわすといたしましょう。